

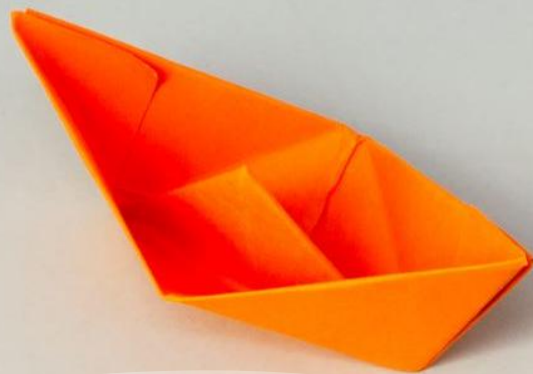
無断での転用、編集、改変、販売、送信、放送、配布、貸与、翻訳などの二次利用はお断りします。

2025年11月1日

東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構

外国人児童生徒教育推進ユニット

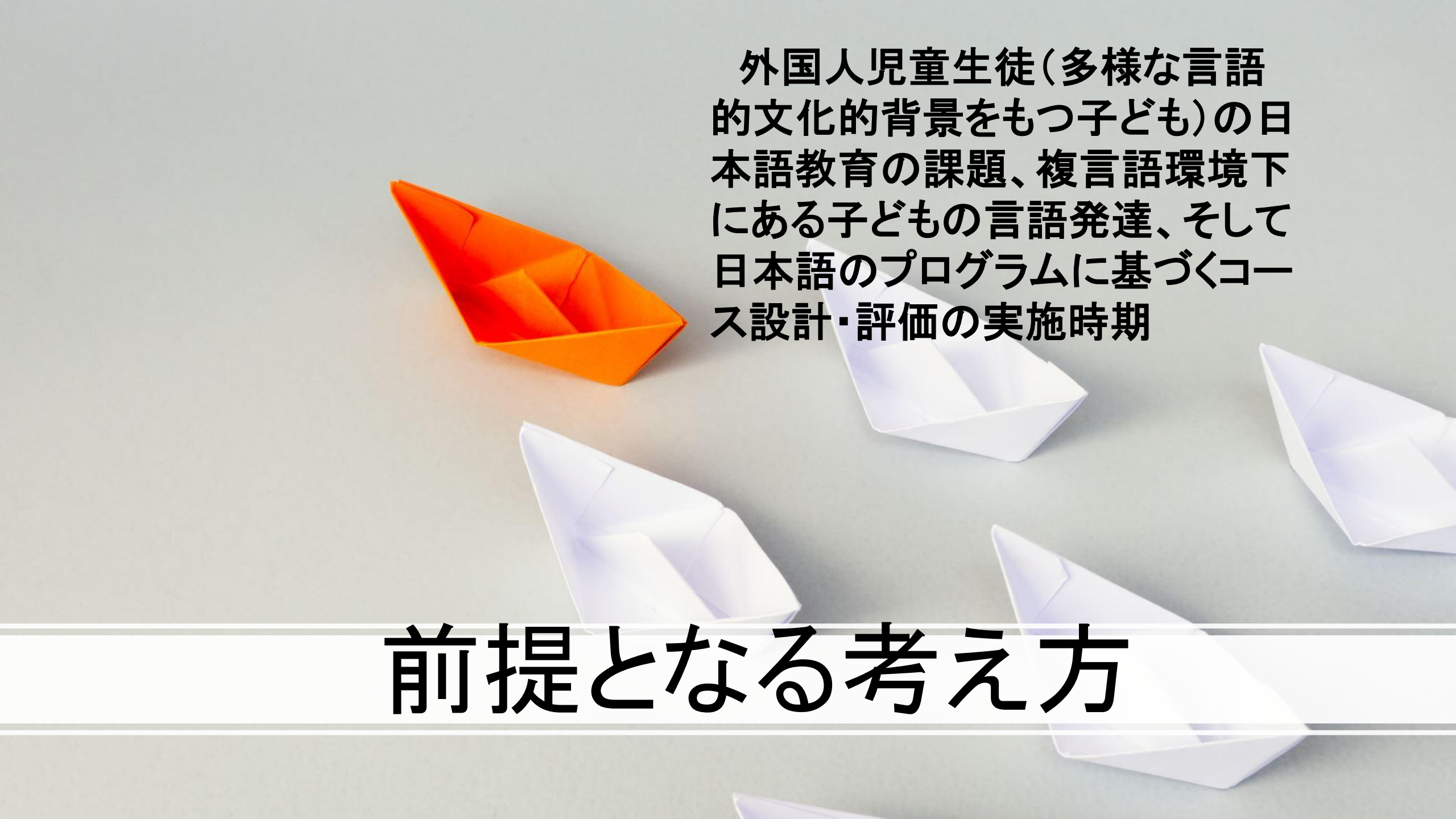
第3回実践交流会



JSLカリキュラムについて

ー「教科と日本語指導の統合学習」のデザイナーー

©齋藤ひろみ(東京学芸大学)

The background of the slide features a light gray surface with several paper boats. One boat is bright orange and is positioned in the upper left quadrant. The other boats are white and are scattered across the lower half of the image, some pointing towards the right and others towards the left. The text is overlaid on the upper right portion of the image.

外国人児童生徒(多様な言語
的文化的背景をもつ子ども)の日
本語教育の課題、複言語環境下
にある子どもの言語発達、そして
日本語のプログラムに基づくコー
ス設計・評価の実施時期

前提となる考え方

(1) 日本語教育の課題

成長・発達過程にある子どもにとって

ことばを獲得すること＝世界を広げ成長・発達すること

(≠言語知識や技能の獲得)

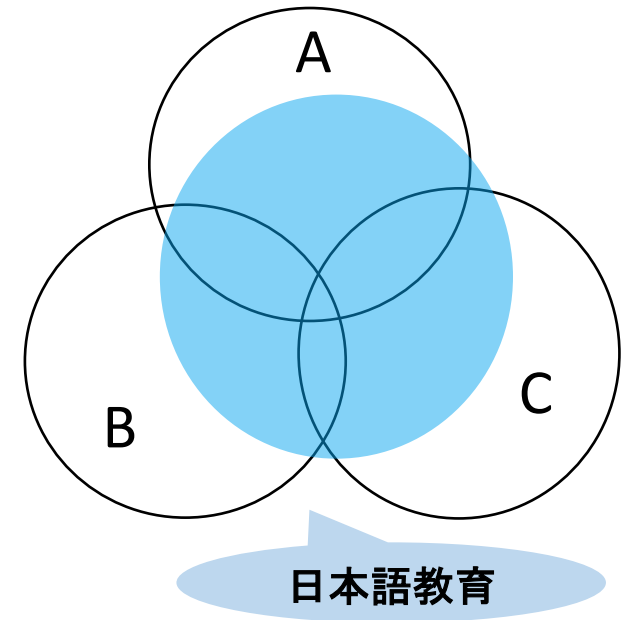
日本語教育＝成長・発達を支える全人的教育

<日本語教育の課題>

A 学校・社会生活…文化適応とコミュニケーション

B 学習・認知面の発達…教科等への学習参加

C アイデンティティ形成・自己実現 …キャリア形成・社会参加



(2) 日本語教育の課題と言語能力

カミンス(2000～)のモデルに照らして

「会話の流暢度・弁別的言語能力・教科学習言語能力」

(＝外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント(DLA)における言語能力モデル※)

課題	A 学校・社会生活		B 学習・認知面の発達
	C アイデンティティ形成・自己実現		
言語能力	①会話の流暢度 Conversational Fluency ＝生活言語能力	②弁別的言語能 Discrete Language Skills 音韻意識、音と文字の関係、文字認識、単文形成力、語彙、文法構造	③教科学習・言語能力 Academic Language Proficiency ＝学習言語能力
プログラム	・サバイバル日本語 ・日本語基礎における運用練習	・日本語基礎 ・技能別日本語 ・内容と日本語の統合学習	・技能別日本語 ・内容と日本語の統合学習

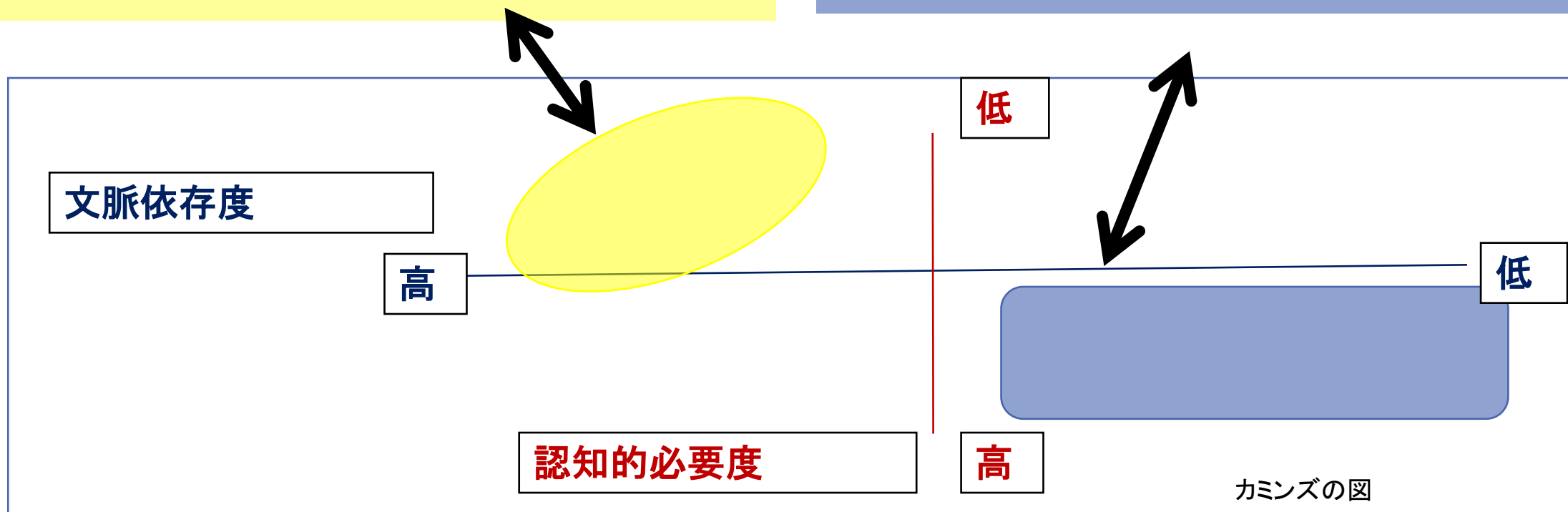
参考 生活言語能力と学習言語能力

日常生活場面のことばの力

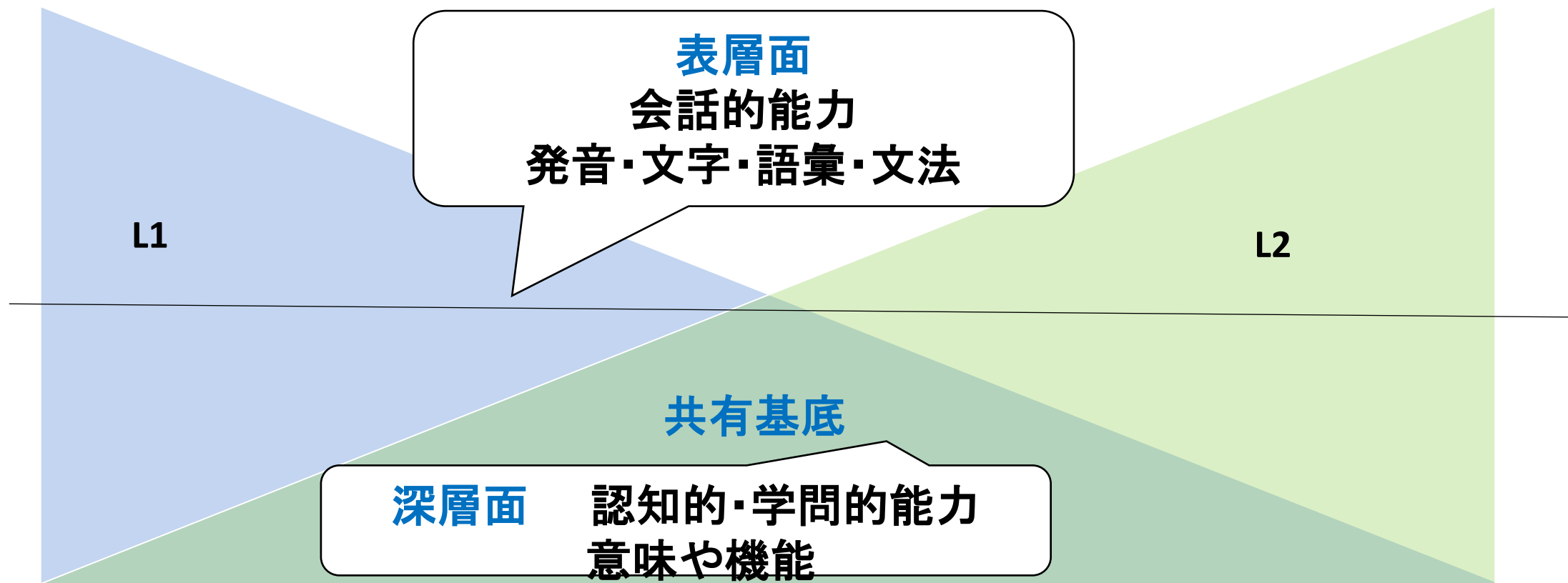
- ・話しことば中心
- ・日々の日本語への接触や友達とのコミュニケーションを通して獲得

学習場面のことばの力

- ・話しことばと書きことば
- ・学習活動への参加と言語を意識した学習を通して習得



参照: ベーカー, コリン (1996) (岡秀夫訳・編) 『バイリンガル教育と第二言語習得』 大修館書店、
中島和子 (2016) 『バイリンガル教育の方法完全改訂版』 アルク

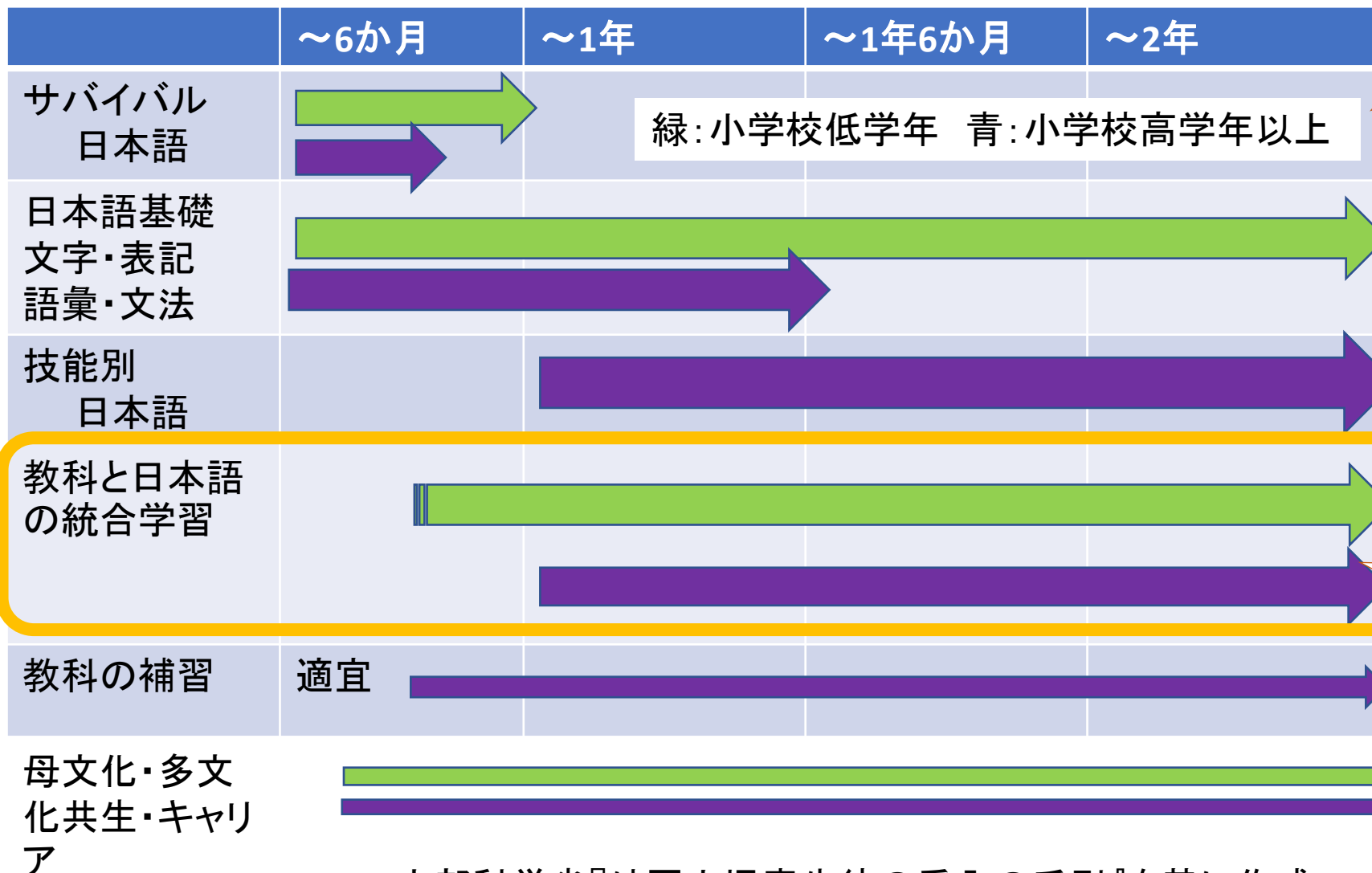


母語の役割: アイデンティティ、自尊感情、認知的発達

参考 母語と第二言語との関係 (カミンズの相互依存仮説)

参照: ベーカー, コリン (1996) (岡秀夫訳・編) 『バイリンガル教育と第二言語習得』 大修館書店、
中島和子 (2016) 『バイリンガル教育の方法完全改訂版』 アルク

(3) 日本語のコース設計ープログラムを組み合わせー ⇒「個別の指導計画」の作成



緑：小学校低学年 青：小学校高学年以上

子どもたちの生活・学習場面に関わらせ課題遂行型(タスク)活動で日本語を使って行動できるように

この後の漢字語彙、文法の学習は、技能別の学習に組み込んで

1センテンスではなく、文章・談話の学習

教科等の内容と日本語の統合学習の考え方で実施(文科省開発「JSLカリキュラム」)

在籍学級と相談して、母語支援が可能であれば母語で

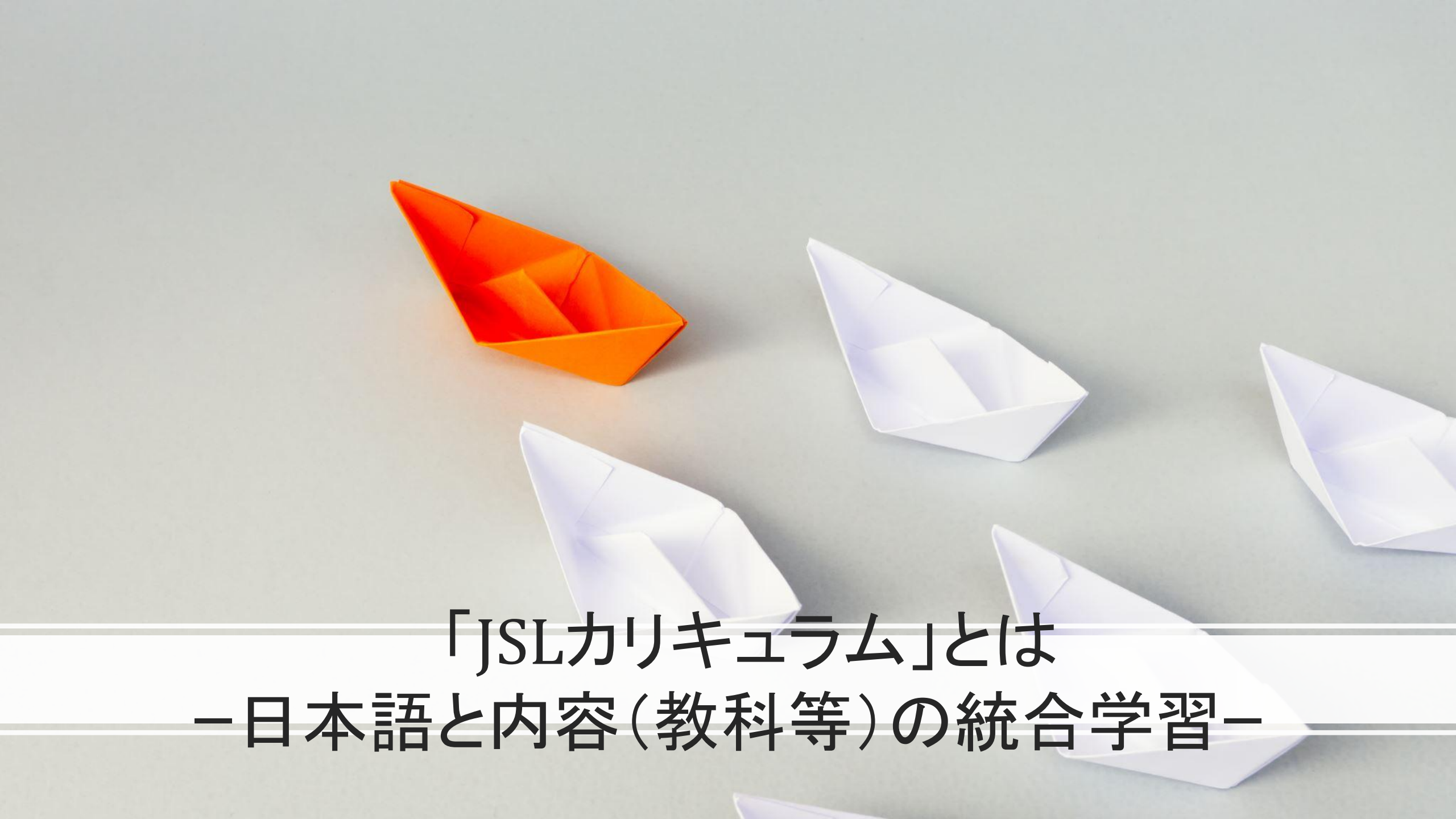
学級・学年・学校の総合・学活等の学習に関連づけて

文部科学省『外国人児童生徒の受入の手引』を基に作成

(4) 評価の実施：

日本語の指導計画（コース設計）に位置づけて





「JSLカリキュラム」とは
－日本語と内容（教科等）の統合学習－

(1) 文部科学省「学校教育におけるJSLカリキュラム」

内容を重視する言語(日本語教育)の考え方

- ・内容を優先。日本語は学習のための言語的手段
- ・内容 × 日本語 のクロスカリキュラム
- ・教科内容 × 日本語⇒「教科と日本語の統合教育」

Japanese as a **Second Language** 「生活上必要な第2の言語としての日本語」

成長期にある子どもの場合: 日本語は、社会・学校生活に必要なコミュニケーションのための道具であり、**友達や先生と共に教科等の学習に参加し**、社会的存在として成長するための言語(「JSLカリキュラム」の主眼)

ねらい: 教室空間で、学習活動に仲間と共に参加するための日本語の力(=「学ぶ力」)を育むこと。

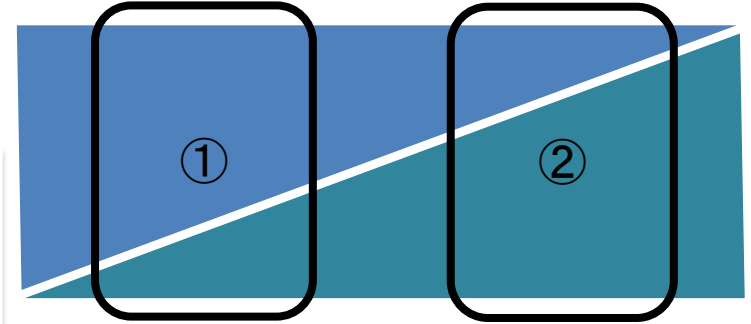
重要な考え方: 内容(教科)の**学習文脈**に埋め込んで(切り離さずに)**ことばを学ぶ**。・・・体験や具体物・視覚情報等による支えのある状況で、教科等の内容に関する探究活動を行い、気づき・理解したことを日本語で表現し・整理する。

内容(教科)と日本語を統合すること・・・横断型

①日本語の学習

- ①日本語の学習で、場面や課題で子どもの関心や内容(教科)を取り入れ、関連付け、**日本語の運用力**を高める。
- ②内容(教科)の学習に、子どもが日本語で参加し、**教科と日本語の両方の力**を高める。

②内容の学習



内容重視型の日本語教育
内容の比重(イメージ)

①日本語指導で

表現や文型の練習時に、教科の内容に関連付ける

- 例) 文型「～くなります」の学習で
理科「植物の観察」に関連付けて
- ・大きくなりました
 - ・トマトが赤くなりました

②教科学習で

教科内容・学習活動で使用する日本語を
学習者の日本語の力に応じて言い換えたり、
理解や表現のための支援をして授業をする

- 例) 社会科の気候の学習で雨温図を見て
- ・月は何度です。
 - ・月から〇月まで、気温が高くなります。

参考③

「授業づくりの視点」

- ・子どもは有意義な文脈で学ぶ
- ・子どもは自分の考えを持っている
- ・子どもは対話で考えを深められる
- ・考えるためには材料が要る
- ・すべ(方略)は必要に応じて使うことができる
- ・学び方は繰り返し振り返って自覚できる
- ・教室や学校に学び合いの文化があると学びやすくなる

国立教育政策研究所(2014)

『教育課程の編成に関する基礎的研究報告書7 資質や能力の包括的育成に向けた教育 課程の基準の原理』

(2) 「JSLカリキュラム」の位置

①いつから？

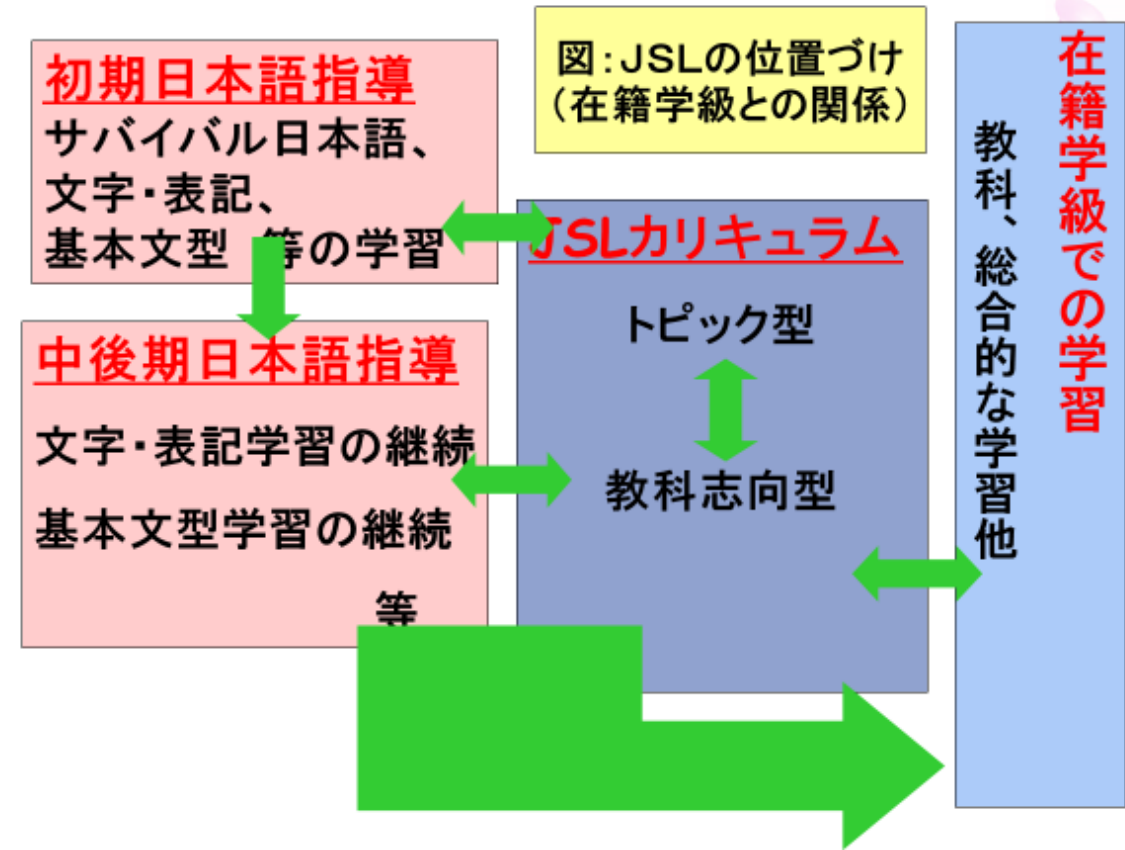
初期の日本語指導の後に導入し、中後期の日本語指導に関連付けながら並行して実施
(★日本語での簡単なやり取りができるようになったらできるだけ早い段階から実施)

②いつまで？

JSLカリキュラムから在籍学級の学習への緩やかな移行が望ましい在籍学級での学習にも関連付けながら実施。

③その判断のために必要な「子どもの捉え方」

- ・学校生活への適応状況・心の状態
- ・日本語の力とそのバランス
- ・教科学習の経験、知識・技能
- ・在籍学級での学習参加状況



在籍学級の学習との関連付けが不可欠

- ・在籍学級での子どもの学習状況に合わせ
- ・在籍学級の学習に関連付けて、内容・目標を決定し実施

2つのタイプのカリキュラム

トピック型

- 身につけさせたい力
各教科共通の基本的活動に参加する力
- 授業の作り方
教科を特定せず子どもの実態・経験に基づき興味関心のあるトピックを巡って
- 授業の構造
体験、探究、発信の流れで活動を組み合わせて

教科志向型

- 身につけさせたい力
各教科の学び方と、教科の学習活動に日本語で参加する力
- 授業の作り方
対象児のその教科における学習状況に基づいて教科内容を選択し
- 授業の構造
各教科の授業展開で教科の学習活動を組み入れて

小学校JSL ⇒ 中学校JSL

小学校JSL

中学校JSL

<共通:基本的な考え方>

既有知識・経験を土台に
体験的・経験的活動によって
日本語を使って活動に参加する力を育む

<認知発達、教科の知識・スキル、経験の違いに着目して>

- ・基本スキル・概念の形成
- ・具体物・体験を中心に
- ・理解は活動で
- ・言語化のプロセスを丁寧に
- ・リズムやテンポも重要



- ・教科の重要概念・スキル
- ・半具体と抽象概念も
- ・理解できるレベルの言語で
- ・言語化を意識して行う
- ・論理性や一貫性を意識化

(3)「JSLカリキュラム」が提供するもの —子どもたちの多様性に対応するために—

子ども達の背景は多様

生育歴、学習歴、日本語の力、認知的発達、家庭環境、
母語、母文化、習慣

⇒固定的カリキュラムでは対応できない

◎対象児童に応じてカリキュラムを作る

「JSLカリキュラム」=授業作りのツールの提供

- 内容選定・目標設定の考え方
- 授業の構造(展開)
- 活動単位(Activity Unit)という考え方
- 日本語支援の方法
- 授業例

文部科学省ウェブサイト CLARINETへようこそ 「JSLカリキュラム」の情報

「学校教育におけるJSLカリキュラムの開発について」(最終報告)小学校編

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008.htm

トピック型JSLカリキュラム AU一覧 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008/004.htm

指導事例 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008/005.htm

実施事例（開発過程での検証授業）

授業例 1 レベル1 テーマ: 木 「わたしの木」(3時間)※

授業例 2 レベル3 テーマ: 月 「月」(3時間)※

授業例 3 レベル3 テーマ: 水 「水道」(3時間)

授業例 4 レベル3 テーマ: 金 「金属の性質」(3時間)

※ 『外国人児童の「教科と日本語」シリーズ 小学校JSLカリキュラム「解説」』スリーエーネットワーク でも紹介

① 学習内容・目標設定

<児童生徒の実態から>

- ①興味関心を尊重して
(教室外の社会に関連ある内容)
行事や日常生活、教室での学習、
学校外(地域、家庭)の出来事
- ②既有知識・経験を活性化・発達
 - ・母国・母語での経験や知識
 - ・子どもの学習歴
 - ・教科に関する知識
 - ・日本語の知識・技能
- ③認知的側面の発達
比較・分析・推論・関
合・評価等の活動

<在籍学級の学習との関連で>

- ④在籍学級での学習参加を促す
 - ・関連のある内容
 - ・単元の重要な内容
- ⑤学び合う力を育む
グループで
 - ・伝え合う

教科の目標:教科として、この授業で何をどのように学
び、何ができるようになることを目指すのかを、具体
的にイメージして設定

日本語の目標:内容(教科)の目標を達成するために、
どのような日本語の表現で何ができるようになれば
よいのかを具体的に設定

② 授業展開1 — 「トピック型」の授業展開

①「体験」: 導入段階

トピックに関する体験や知識(既有知識)を活性化して(日本語でどう表現するかを知り)、課題を設定する。

②「探究」: 展開段階

トピックについて、調べる、観察する、実験するなどの方法で、課題について探究し、気づいたり新た知ったりする。

③「発信」: まとめの段階

探究段階で新しく知ったことを、ことばで整理して既知のことに関連付け、それを他の人に伝える。

② 授業展開2 ー教科志向型の授業展開

国語：4領域1項目で、伝え合う場を構成
話す・聞く、読む、書く、言語事項

算数：問題を把握する⇒解決の計画を立てる
⇒計画を実行する⇒結果を検討する

理科：課題を把握する⇒予想する⇒観察・
実験・調査する⇒考察する⇒発表する

社会：課題をつかむ⇒調べる⇒まとめる

③ 活動単位: AU (Activity Unit) トピック型「JSLカリキュラム」のAU(全体像)

体 験

A: 知識・経験を
確認する

B: 興味関心を抱く

探 求

C: 観察する

D: 操作して調べる

E: 情報を利用する

F: 分類して考える

G: 比較して考える

H: 条件的に考える

I: 推測する

J: 関連付けて考える

発 信

K: 表現する

L: 判断する

「学校教育におけるJSLカリキュラムの開発について」(最終報告)小学校編 > 資料2 AU一覧(全体)
文部科学省
https://www.mext.go.jp/a_menu/shoutou/clarinet/003/001/008/004.htm

活動単位 (ActivityUnit) と参加のための日本語表現

AUの例 1

例:トピック型 AU C-2
観察する「形状などを観察する」

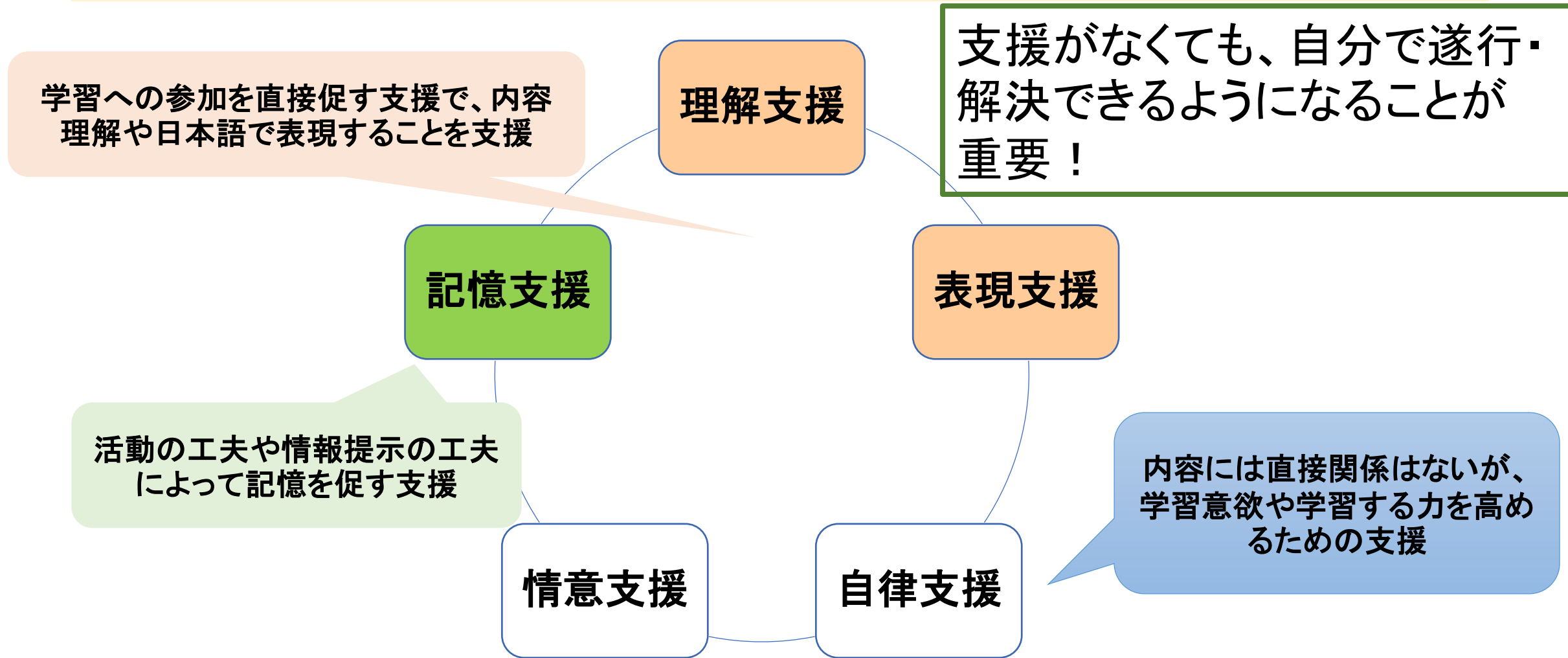
参加するための基本表現とバリエーション

- ・どんな形をしていますか。
- ・どんな形ですか。何みたいですか。
- ・まるいですか。三角ですか。手みたいですか。

- ・手みたいな形をしています。
- ・手みたいです。
- ・まるじゃないです。
はい、手みたい。

AU:教科の様々な活動から抽出した基本単位となる活動

④ 活動参加のための支援の工夫 (スキヤフォールディングの考え方で)



参考 学校教育におけるJSLカリキュラム(中学校編)2. 日本語支援の考え方とその方法

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2015/10/06/1235804_002.pdf

3つの支援の具体(直接的支援:理解・表現・記憶)

理解支援	表現支援	記憶支援
・言い換える ・視覚化する ・色分けして示す。 ・例示する 具体的な例を示す ・比喻を利用する ・対比させる ・明示する ・簡略化する ・整理する ・補足する ・関連付け ・既有知識を活性化する	・選択肢を示す ・表現方法を示す ・モデルを示す ・キーワードを示す ・対話で引き出す ・母語で表現させる ・学習した内容を分割して示す ・内容構成のためのシートを準備する	・内容の構成例を示す ・視覚化する ・身体化する ・音声化する ・物語化する ・連想、グループ化 ・反復する 上の工夫をして、繰り返し聞かせる、言わせる、描かせる、読ませる ・接触機会を増やす

参考④ リライト教材について

(光元聰江・岡本淑明(2006)『外国人児童・生徒を教えるためのリライト教材』ふくろう出版より)

リライト教材: 入国して間もない時期から、**教科の学習に入りやすくするため**に、**教科書本文を子どもの日本語力に対応させて書き換え教材**

リライト教材の種類

- ①口頭リライト教材
- ②要約リライト教材
- ③あらすじリライト教材
- ④全文リライト教材
- ⑤ポイント教材(一部をそのまま)
- ⑥注釈リライト教材(本文はそのまま)

表現はやさしく、**内容は学年相当レベル**で。
一人一人の発達に応じた教育をするための
のリライト…学習を促進するための教材

<書き換えの留意点>

- ◇題材の主題・主張に沿って
- ◇在籍学級に近い学習・年齢相応の思考
- ◇「です／ます」⇒教科書と同じ文体
- ◇教材内容に必要な語彙・文型で
- ◇よく使う表現はまとまりとして
- ◇漢字は総ルビ 等

★単に、文構造を単純で易しく、簡単な
語彙に書き換えるのではない。
≠成人対象のやさしい日本語



「JSLカリキュラム」の授業づくり

(1) 「トピック型」SLカリキュラム」の授業づくりの手続

授業づくりの流れ	決定すること
0 対象児童生徒の把握	日本語の力、母語の力、教科の学習歴、学習内容に関する事前の経験、知識・スキル
1 在籍学級の授業との関係の明確化	学校行事、教科等の学習にどのように関連づけるか決定する。
2 学習内容の決定	対象児童の実態(経験、学習状の課題、興味・関心)と、1で検討したことに基づき、トピックを決定する
3 目標の設定	どのような表現を使って、どのような活動(探究型の)に参加できるようにするかを具体的に示す。
4 活動展開の決定	「体験」⇒「探究」⇒「発信」(問題解決型の授業展開)
5 日本語表現の決定	各活動に参加するための日本語表現 「教師の働きかけ」と「児童生徒の応答・発話」を具体的に
6 支援、教材・教具の具体化	理解・表現のための支援(視覚化、操作化) 必要な教材・教具(作成する)
7 評価の対象と方法の決定	どの活動で何を見てどのように評価するか

AUを参照して

(2)「教科志向型JSLカリキュラム」の授業づくりの手続

授業づくりの流れ	決定すること
0 対象児童生徒の把握	日本語の力、母語の力、教科の学習歴、学習内容に関する事前の経験、知識・スキル
1 在籍学級の授業との関連付け	全て取り出し / 一部取り出し、先行 / 途中補習 / 後行
2 学習内容の決定	対象児童の実態に応じて、学習する教科単元の内容を絞り込む
3 目標の設定	教科内容についての目標(重要な用語・表現の選定) 日本語に関する目標＝教科の目標達成のために、どのような日本語の表現を使って何ができるようになるかを具体的に設定
4 活動展開の決定	各教科の授業展開を、スモールステップで (探究型・問題解決型の授業展開に)
5 日本語表現の決定	授業内の各活動に参加するための日本語表現 「教師の働きかけ」と「児童生徒の応答・発話」を具体的に
6 支援、教材・教具の具体化	理解・表現のための支援(視覚化、操作化) 必要な教材・教具(作成する)
7 評価の対象と方法の決定	どの活動で何を見てどのように評価するか

各教科のAUを
参照して

(3) 「JSLカリキュラム」の授業づくりのポイント

- ①学習経験/興味関心等から内容を決定 ⇒ 探究型の学習活動へ
- ②目標 どのような表現を使ってどのような活動に参加できることを目指すか。

③授業展開

④活動毎に

日本語の表現を設定

話しことば中心
→ 書きことば
(一方向で話す・書く)

⑤学習活動に参加するための支援の工夫

授業の展開	日本語の表現	支援・教材
既習知識・経験を活用し、日本語で確認し、課題を把握する。	活動参加を促す「教師の働きかけ」と「子どもの応答」の日本語表現を具体的に想定する。	各活動への参加を促す支援と教材の工夫
各教科の探究活動 課題について、操作・観察・調べる等の活動を通して探究する。	観察時(話しことば・やりとりで) T:AとBはどこが違う? S:Aは～。でもBは～。結果について話し合う T:どうして違うのかなあ? S:～だから。	理解支援 表現支援 記憶支援 + 情意支援 + 自律支援
気づき、分かったことを日本語でまとめ、他者に伝える。	観察をまとめる(書きことばで) S:～を調べました。Aは～けれども、Bは～でした。～が違うからです。	

ワーク1

次の単元の学習で、日本語学習中の児童生徒が内容の理解や活動参加に困難を感じるところや、つまずきそうなところは、どこでしょうか。



ワーク2

この単元を「JSLカリキュラム」にの考え方で授業をします。

教科の目標と、日本語の目標をどのように設定しますか。



ワーク3

話し合い2で設定した目標に照らし次の3点を決定してください。

○「**探究**」型の活動として何をしますか。

○その活動にはどのような日本語の表現で参加を促しますか。

教師の働きかけと子どもの反応として表してください。

○最後にどのような表現でまとめますか。

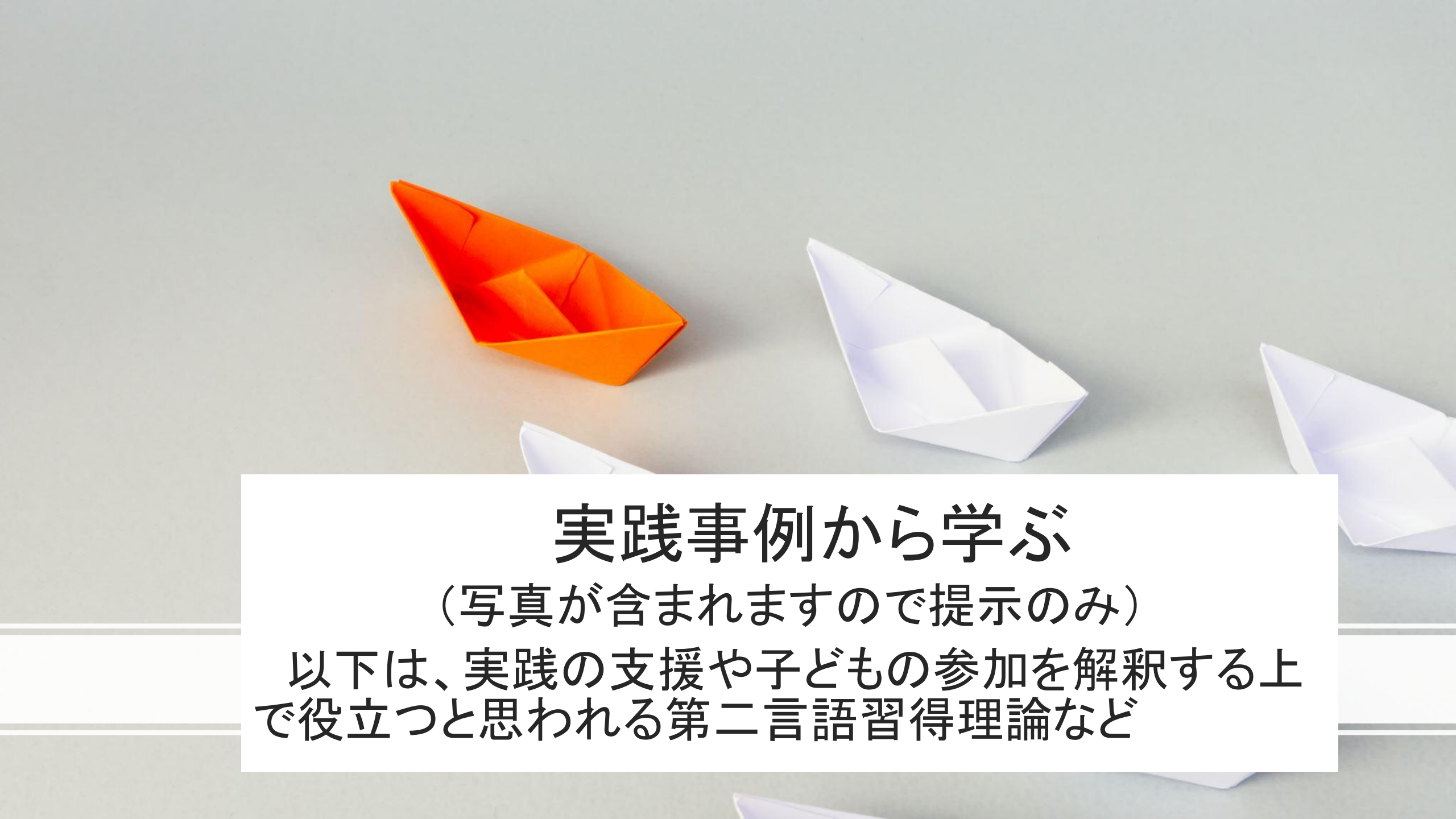
教科書を参考に、**書きことばの文章**にして表してください。



ワーク 1、2、3「JSLカリキュラム」の活動を構想する

学年・教科・単元 ()

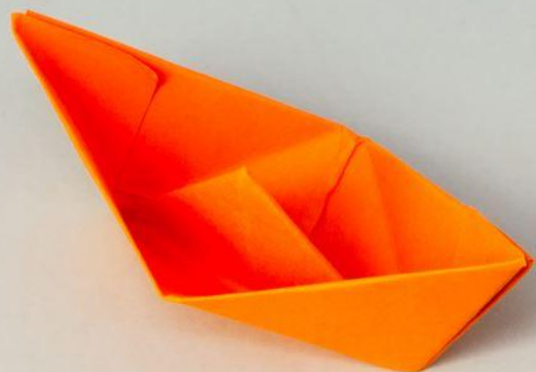
困難の要因	
目標	教科： 日本語：
主な活動 (探究型の活動)	
探究活動に参加 するときの表現	
まとめの文	



実践事例から学ぶ

(写真が含まれますので提示のみ)

以下は、実践の支援や子どもの参加を解釈する上で役立つと思われる第二言語習得理論など



参考

言語習得に関する関連理論

参考① インプット・アウトプット・インターアクション

インプット仮説 (krashen)	アウトプット仮説 (Swain)	インターアクション仮説 (long)
未習得の語彙や文法項目の言語形式をわずかに含んだインプット(理解可能なインプット「i+1」)に多く触れることで、習得が進む。	アウトプットによって発話の正しさを確認でき、自分の問題点に気づき、自分の言語使用を振り返り、メタ言語機能を発揮して、習得を進められる。	アウトプットに対するフィードバックを通して自身の言語体系(仮説)の検証が行われ、意味交渉(意味確認のやりとり)が行われ、習得が進む。

参考② 言語習得プロセス

インプット



気づき



理解されたインプット



インテイク(内在化)



統合(自動化／長期記憶化)



アウトプット



フィードバック

インターアクション

形式・意味・機能のマッピング

意味のある文脈で、日本語の音や綴り、文法規則等を意識化させること(フォーカス・オン・フォーム)が重要

小学校低学年頃まで

場面にくっつけて**固まり(チャンク)**で覚える

アウトプットが見られないとしても

聞いてわかるが話さない時期がある(沈黙期)

形式を意識

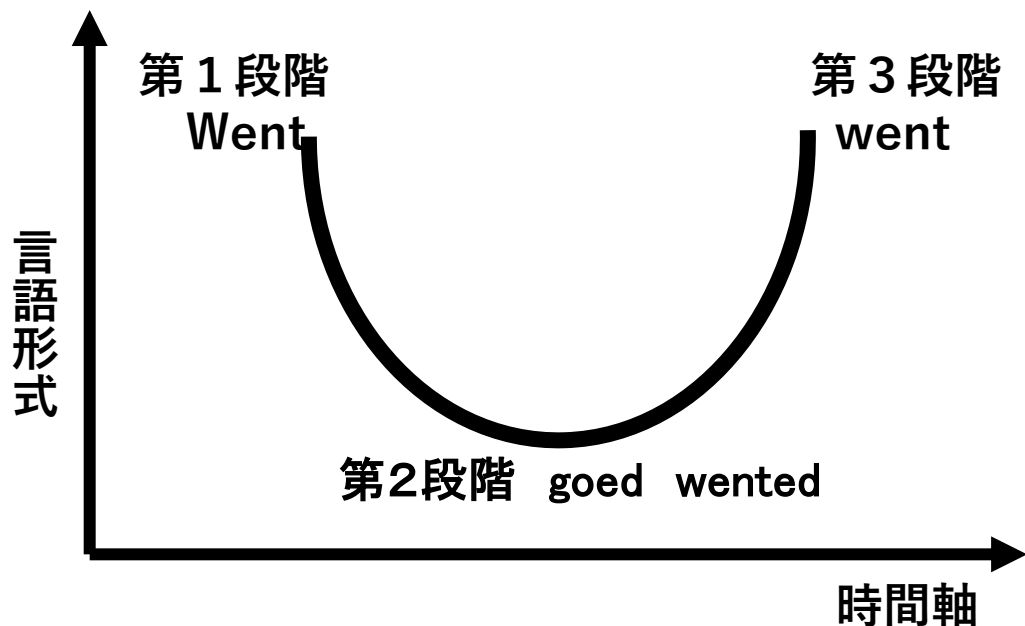
学習項目を繰り返し使い自動化が進むよう発話機会を増やすことが重要

仮説検証

フィードバックにより 自分が作ったルールを検証する機会になる

参考③ 中間言語発達のU字型曲線 (Kellerman1985)

JASET SLA研究会(2013)『第2 言語習得と英語科教育法』より



第1段階 個々の規則を覚える

例: goの過去形はwent

第2段階 規則動詞の過去形の活用
ルールを学習し、不規則動詞に過剰に適用

例: goの過去形 goed? wented?

第3段階 規則動詞と不規則動詞の区別ができ、正しく活用できる

例: went

再構築(restructuring): 中間言語の質的变化

新しい言語項目の学習 ⇒ 構築してきた言語体系が混乱(正確さ低下)

⇒ 情報を取り込んで修正(正確さ回復)

「中間言語(interlanguage)」セリンカー

学習者は習得過程でその時々、独自の規則の組織的言語体系をもつ

参考④ 言語の4技能 「聞く・話す・読む・書く」

	音声	文字
理解（受容）	聞く	読む
表現（産出）	話す	書く

理解できても、表現できない
(話す・書くと、間違いが多い……)
言語の形式の知識・技能が必要

音声⇔文字

音と文字の対応

文字の正しい読み書きの力(識字・書字)

話しことば⇔書きことば

書きことばで重視される点

文章を構成する力（文と文を繋ぎ段落を構成し、一貫性を維持する力）

不特定多数の読み手を意識して書く力／目的や書き手の存在を意識して読む力

子どもたちの自然な学びのステップは

音声言語 → 文字言語

話しことば → 書きことば



学習活動の組み立て(展開)の決定

参考⑤ フォーカス オン フォーム (focus on form)

意味内容を授業の中心に据えつつ、必要に応じて学習者の注意を言語形式に向けさせること

<例>

- ・インプット洪水 (input flood) ……繰り返し聞かせること
- ・インプット強化 (input enhancement) ……色を変える、カードにする
- ・リキャスト (recast) ……謝ったら正しい表現を聞かせる
- ・形式交渉 (negotiation of form) ……やりとりで正しい形式にする

「JSLカリキュラム」の事例

＜JSLカリキュラムに関する説明・解説が掲載された書籍＞

- ・川上郁夫・石井恵理子・池上摩希子・野山広(2009)『「移動する子どもたち」のことばの教育を創造する—ESL教育とJSL教育の共振』ココ出版
- ・佐藤郡衛・齋藤ひろみ・高木光太郎(2005)「JSLカリキュラム「解説」」スリーエーネットワーク

＜実践事例が採録されている書籍＞

- ・齋藤ひろみ・佐藤郡衛(2009)『文化間移動をする子どもたちの学び—教育コミュニティの創造に向けて』ひつじ書房
- ・齋藤ひろみ・池上摩希子・近田由紀子(2015)『外国人児童生徒の学びを創る授業実践—「ことばと教科の力」を育む浜松の取り組み』くろしお出版
- ・齋藤ひろみ編『外国人の子どもへの学習支援』金子書房
- ・齋藤ひろみ「第5章 教科学習と日本語学習をつなぐ」 西川朋美編『外国につながる子どもの日本語教育』くろしお出版

その他

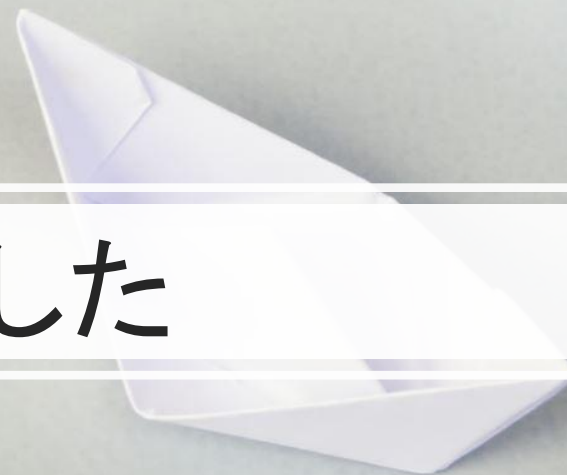
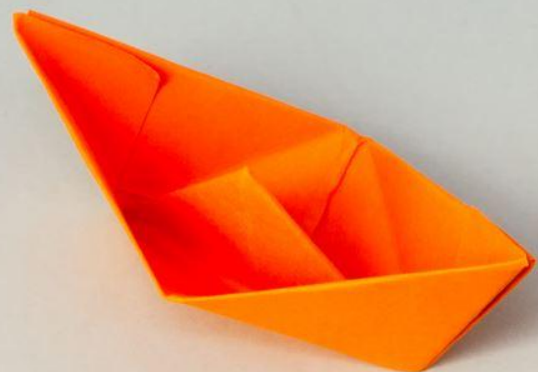
年刊雑誌 『言語教育実践 イマ×ココ』 ココ出版
子どもの日本語教育研究会ジャーナル

https://kodomo-no-nihongo.com/category/journal/already_published/

「豆の木モデル」 外国人児童生徒等教育を担う 教員の資質・能力モデル



資質・能力の4要素と課題領域		求められる具体的な力
捉える力	子どもの実態の把握	文化間移動と発達の視点から、外国人児童生徒等の状況を把握することができる。
	社会的背景の理解	外国人児童生徒等の背景や将来を、社会的、歴史的文脈に位置付けることができる。
育む力	日本語・教科の力の育成	外国人児童生徒等の実態等に応じ、言語教育に関する専門的知識に基づいて、日本語・教科の教育を行うことができる。
	異文化間能力の涵養	外国人児童生徒等と周囲の子どもとの相互作用を通して、双方に異文化間能力を育てることができる。
つなぐ力	学校づくり	保護者や地域の関係者と連携・協力して、よりよい支援、教育のための学校体制をつくることができる。
	地域づくり	異なる立場の人々と協働しながら、学習環境としての地域づくりをすることができる。
変える／変わる力	多文化共生社会の実現	社会的正義と公正性を意識し、多文化共生を具現化することができる
	教師としての成長	外国人児童生徒等に関する教育・支援活動を振り返り、自己の成長につなげることができる。



ありがとうございました